

# 身近な花材を利用した生け花支援システムの開発

## 1. 背景

日常生活に花を取り入れることは、心や感情を豊かにする。そのため、花を多様な材料と組み合わせて構成し、鑑賞する芸術として華道やフラワーアレンジメントなどが、日本のみならず海外でも幅広く好まれている。しかし、一般的には生け花は親しみにくい存在であり、生け花に取り組むまでに敷居が高いのが現状である。

## 2. 目的

本プロジェクトは、誰でも簡単にユーザの身近にある花を用いて生け花体験が可能になることを目的とした、生け花支援システムを提案・実装を行う。

## 3. 開発の内容

生け花支援アプリケーション「CADo(きゃどう)」(以下、「CADo」と表記する)は、写真撮影した花材を元に、生け花の美しいデザインや手順を提示する Android アプリケーションである。これを図1に示す。

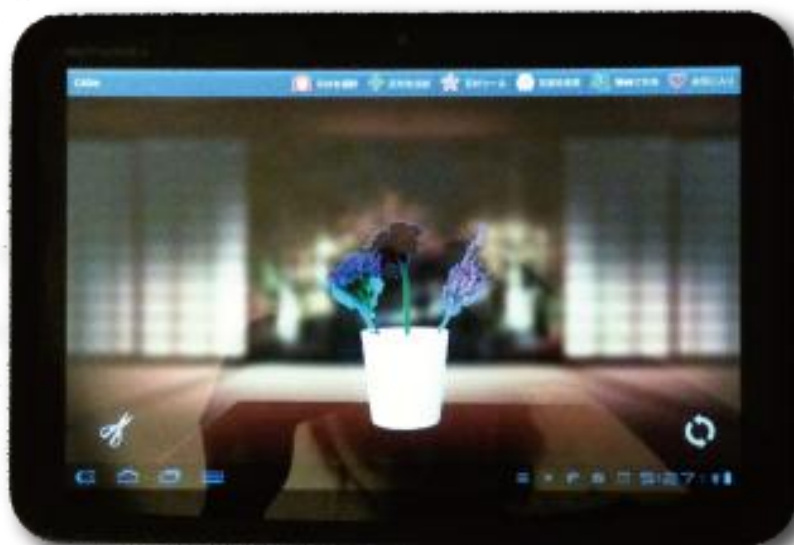


図1. 生け花支援アプリケーション「CADo」:

端末(Motorola XOOM)、ソフトウェア(Air Application)

一般的に、美しいデザインイメージを決定することは難しい。しかし、華道ではデザインイメージが構造化されている部分があるため、その部分を参考にし、デザインイメージを例示する。また、生け花のデザインイメージを決定し、その画像をWebに共有することが可能である。

## ● 「CADo」の利用シーン

「CADo」は、ユーザの手元に花や素材があることを想定している。特にメインとなるユーザは、手元に花材があるが、アレンジ方法がわからない人が対象である。素材例：道端に咲いた雑草、記念日のプレゼントのブーケ、歯ブラシやボールなどの多様な素材

## ● 「CADo」の利用方法

「CADo」を利用するためには、3つの手順がある。この流れを図2に示す。



図 2. 「CADo」の利用の流れ

まず、ユーザが花材を白い机の上に置き、Android 端末で撮影する。次にユーザが撮影した花材に対して切り抜き処理をする。それが終了してデザイン生成ボタンを押すことで、ユーザが用意した花材に合わせた生け花の美しいデザインイメージとして配置された映像を確認することが可能になる。最後に、生けた写真を Facebook の自身のページに共有することで、他者の作品も閲覧できる流れになっている。

## ● 「CADo」の特徴

「CADo」では、一般的な花材のみならず、歯ブラシなど多様な素材も美しく生けることが可能である。これは、それぞれの素材に対し、花の大きさや茎の長さを設定することで、華道のルールに従うように配置することができるからである。実際に歯ブラシと串かつを生けた様子を図3に示す。

これにより、華道初心者が花に抱く敷居を下げるために、ユーザの手元にある素



材を簡単に生けることが可能である部分に価値があると考える。

図 3. 多様な素材を生けた様子

#### 4. 従来の技術（または機能）との相違

華道初心者が華道を習得するには、学校教育のような段階をふみながら体系的に学ぶ方法とは異なる。そのため、華道熟達者が示す「型」を繰り返すことで、体験的に学んでいく。しかし、これらを習得するには時間を割く必要があり、花材を購入するためのコストも高いという問題点がある。

「CADo」では、ユーザの身近にある花材を利用することが可能であるため、従来の生け花よりも花材が手に入り、簡単に取り組むことができる。また、デザインセンスが必要になるという先入観から生け花から遠ざかっていた人に対しては、誰にでもわかりやすい美しい生け方のサンプルとなるため、生け花の敷居が下がる。

以上から、「CADo」では、従来の華道にはない、「手軽さ」と「簡単に始められる」部分に未踏性がある。

#### 5. 期待される効果

「CADo」を利用することで、誰でも簡単に生け花に取り組めるようになり、芸術活動として敷居が高い華道が身近になる。また、ユーザが多様な花材を用いて生け花をすることができるので、今まで見たことのない新しい生け花を鑑賞することができる。

#### 6. 普及（または活用）の見通し

「CADo」の普及の見通しは、β版として Android Market に公開することである。現状では、生け花に特化したアプリケーションが少ないため、生け花のエキスパートな要素を持つ新しいアプリケーションとしてより多くのユーザに利用するための準備を進める予定である。また、今回開発した「CADo」では、Android XOOM 端末のみでの動作確認しか行っていないため、他端末での動作を確認することを早急に行なっていきたい。また、Android アプリとして終わるのではなく、iPhone アプリとしての展開も視野に入れている。

## 7. クリエータ名（所属）

横窪 安奈

（お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 理学専攻 情報科学コース）